



2020年12月

飼料価格の上昇で試される 米国の食肉生産の回復力

リード・エコノミスト
ウィル・ソーヤー

目次

はじめに	1
転換期にある中国	2
飼料コストの上昇	2
米国の食肉供給拡大の鈍化	3
収益性をめぐる可能性	3
おわりに、2021年の見通し	4

要点:

- 米国の食肉生産は、2012年以降、飼料コストが比較的安価で推移してきたことが追い風となり、2014年から2019年までの5年間、牛肉・豚肉・家きん類の生産はいずれも史上最高のペースで拡大してきた。
- 米国の食肉生産者は、2021年に過去10年間で最大となる飼料コストの上昇に直面する見通しであり、COVID-19の影響により混乱が続いた2020年からの回復力が試される。
- 中国は、ASFによる豚群の壊滅的な被害の後、豚肉の生産・供給を再構築しつつあり、飼料穀物の輸入を増やしている。これが米国の穀物の輸出増加ならびに価格上昇をもたらしている。また南アメリカやヨーロッパ東部で発生しているラニーニャ現象が、穀物および油料種子の収穫見通しにおけるリスクとなっている。
- COVID-19のパンデミックで外食需要が激減したこと、食肉工場の一時的な閉鎖や稼働率のペースダウンを受けて、牛、豚、ブロイラーの生産者は、2020年の平均利益が赤字に転じた。
- 2021年はトウモロコシと大豆ミールの価格が過去数年間で最高に達すると予想されることから、食肉および家きん類の生産者の収益性が十分に回復することは期待できないだろう。

はじめに

2021年、トウモロコシおよび大豆ミールの価格は2011年以降で最大の上げ幅で上昇する(グラフ1参照)。これによって、米国の食肉生産は飼料コストの12%増に直面すると予想される。トウモロコシの先物はブッシェル当たり4ドル強、大豆ミールの先物はトン当たり350ドル近辺にあり、肉牛の肥育業者や養豚・養鶏業者は、過去数年間で最大の飼料価格の値上がり直面している。

この飼料コストの上昇は、食肉の生産者が困難な状況にある時期に訪れる。2020年、食肉および家きん業界の利益は、COVID-19による価格低下によって圧縮されてきた。パンデミックが打撃を与えたのは、需要(特に外食需要)だけではない。工場の閉鎖、従業員の欠勤が増えたことによる工場の生産性低下、さらに賃金の引き上げや個人用防護具(PPE)への投資によるコスト増が食肉処理業に打撃を与えた。こうした工場のコスト増加は、生産者の利幅や食肉の価格、そしてサプライチェーン全体に悪影響を及ぼした。

グラフ1:米国の食肉の種類別の飼料コストの上昇(前年比)



出典:米国農務省・農業販売促進局(USDA・AMS) シカゴ商品取引所(CME)、CoBankの推定

飼料価格の上昇の主因は、中国の穀物需要である。数年前にアフリカ豚熱(ASF)によって肉豚群が大打撃を受けて以降、中国は豚群および食肉供給の再構築を進めてきた。11月発行の米国の豚肉輸出レポートでも述べた通り、中国はASFによって失われた食肉の自給率を再び回復しようと取り組んでいる。今後数年間で、中国の輸入は食肉製品から飼料へと転換していくことが予想される。米国農務省(USDA)によると、2020~21年度の中国のトウモロコシ輸入量は3倍を超えて増加する見通しで、その増加分の多くは米国から輸出される見込みだ。もう一つの不確定要素は、今後数カ月間の南アメリカにおけるラニーニャ現象の影響である。中国向けのトウモロコシ・大豆の主要輸出国であるブラジルおよびアルゼンチンの主要地域で、より乾燥した気象環境が生じる。

転換期にある中国

世界最大の人口を有する中国における過去2年間の食肉不足は、貿易フローの大規模な変化を引き起こした。中国は、2018年の後半以降に国内の豚群の半数以上を失って以来、世界最大の牛肉・豚肉輸入国となり、家畜類を合

わせると、日本をも凌ぐ勢いがある。USDAの予想によると、中国の食肉輸入量は、2017年から2020年に3倍以上に増加した後、2021年は減少する見通しだ。2021年の食肉輸入量は3%減と予想されるが、その後も数年間はさらに大幅な減少が予想されている。これとは対照的に、中国の2020~21年度の家畜用飼料の輸入量は、大豆だけでなくトウモロコシも大幅に増加し、過去最高となる見通しだ。

中国は、長きにわたり大豆の最大の輸入国であったが、トウモロコシの輸入

動向も世界の穀物および商品市場に影響を与えつつある。米国のトウモロコシも中国への輸出増加が期待されている。USDAは、収穫量の15%だったトウモロコシの輸出量は、24%相当まで拡大すると予想している。中国の農産物輸入におけるこうした変化は、ゆっくりだが着実に転換し、食肉や穀物市場にとどまらず、世界的な農業全体にまで影響を及ぼしている。ASFの発生以前、中国の食肉消費量は世界の30%近くを占めていたが、2020年は世界の食肉貿易においても同様の水準を占める見通しだ。中国の食肉輸入が減り、飼料の輸入が増えるに伴って、米国の食肉生産は飼料コストの上昇と生体価格の下落に直面し、結果としてマージンをめぐる環境はさらに厳しくなることが予想される。

飼料コストの上昇

過去10年間の飼料コストは、概ね米国の食肉および家畜の生産者にとって追い風であり、過去8年間のうち6年間は、飼料コストが前年より低下していた。これは、過去8年間に大規模な経済的損失、倒産、廃業を経験した食肉の生産者にとっては、大きな負担軽減となっていた。

データ2: 米国の食肉の種類別の飼料コストの上昇(四半期毎)



出典: USDA・AMS、CME、CoBankの推定

飼料コストの影響は、家畜のライフサイクル、飼料の配合割合、他の飼料コストの構成要素といった多くの理由から、畜種ごとに異なる。2021年は、家畜生産者の中でも肉豚生産者が最も高い上昇率・14%の飼料コスト上昇に直面することが予想され、僅差で牛肥育業者が13%増、鶏肉生産者が11%増と続く(データ2)。

ライフサイクルの短期化で、飼料コスト上昇の影響が2020年へ前倒しされたことがその主因である。事実、鶏肉生産者はすでに前年水準比で飼料コストの上昇を経験しており、牛および豚のセクターでは、それが2021年の第1四半期に実感され始めるだろう。現在のトウモロコシおよび大豆ミールの先物価格の上昇曲線を基準に考えると、セクター全体で飼料コストの上昇が最も顕著になるのは2021年の夏季、第2四半期に飼料コストが18%、第3四半期には16%上昇するだろう。

米国の食肉供給の成長鈍化

食肉の供給は増加を続けると予想されるものの、成長率0.8%増は米国の食肉生産においては、2014年以降で最も低い伸び率だ。過去6年間、米国の食肉業界は、全体で年平均2.5%の伸び率で成長してきた。最大のけん引役は、豚肉の年3.5%の生産増加である。豚肉業界ではこの間、少なくとも3つの大規模工場が新設された。年平均成長率2.5%の鶏肉セクター、2%の牛肉生産もまた成長に貢献した。

2021年は、米国の消費者がCOVID-19

によるロックダウンや外食店の閉店から脱するにしたがって、食肉の需要、特に外食からの需要が食肉および家きん類の価格を押し上げるだろう。COVID-19の感染者増加の影響、先日アナウンスされたワクチン配給のタイミング、そして2020年の経済の傷跡など、2021年の需要見通しは答えよりも疑問で満ちている。しかし、食肉の供給増加が人口増加を実質的に上回る見通しにはないため、こうした飼料コストの上昇も価格の上昇で相殺されるだろうという楽観的な見方もある。

収益性をめぐる可能性

2021年、牛肉・豚肉および家きん類の生産者が構造的なコスト増加に直面する中で、生産者マージンはコストより収入からもたらされる機会が増えるだろう。幸いにも、生産者と処理業者は食肉価格の上昇によって収益を高めて、飼料コストの上昇分を吸収できる可能性を示す明るい兆しがある。

1. COVID-19のワクチン:

2021年上半期までに多数のCOVID-19のワクチンが食品医薬品局(FDA)の認証を得て、その後一年を通して分配が強化される見通しであることから、COVID-19のパンデミックにも終わりが見えてきそうだ。米国で集団免疫が獲得されるのはまだ数カ月先ではあるが、そうなれば食品および食肉の消費パターンの正常化が進むことが予想される。米国労働統計局の10月の売上データによると、外食の売上は前年同月比14%減と、4月時点の同53%減に比較して回復傾向を示している。

2. 米国の食肉工場の稼働における安全性強化:

米国の食肉および家畜類の企業は、2020年に安全な労働条件の確保と工場の営業停止リスクの低減のために投資した金額は25億ドルと推定される。食肉工場内のCOVID-19のリスクをゼロにはできないものの、COVID-19感染者数が全国的に、また工場周辺地域で過去最高に達した2020年半ば以降も、米国の食肉工場は生産能力の約95%で稼働を続けることができている。秋から冬にCOVID-19の新規感染者数が増えることを踏まえれば、工場の生産能力が停止する可能性を否定はできないものの、食肉および家畜類の主要処理業者が行った対策によって、2020年4・5月のような経験が繰り返される可能性は大幅に抑えられている。

3. 工場におけるCOVID-19対策コストの減少:

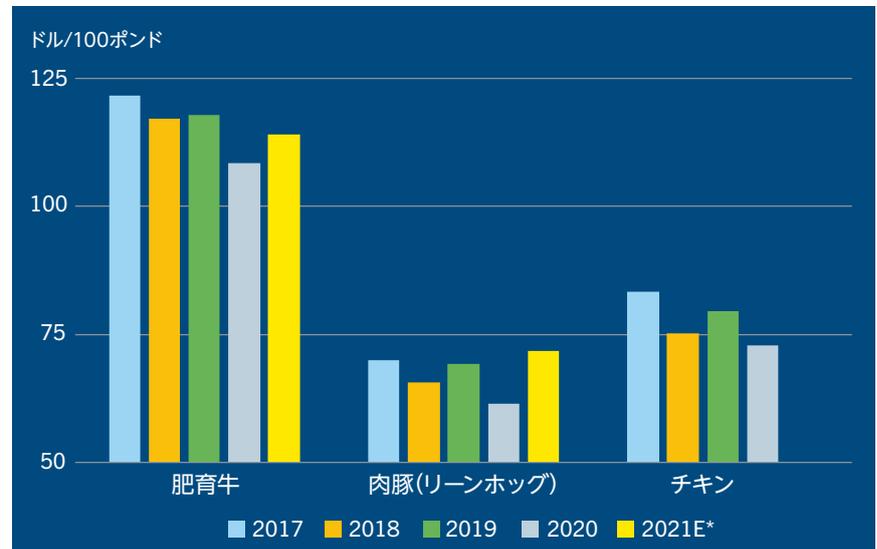
米国の食肉企業がCOVID-19対策のために負担するコストの多くは、ワクチンおよび集団免疫が獲得されるまで続くだろう。しかし、稼働状況がより正常化され、欠勤の水準

が改善し、従業員の罹患が減っていることから、2021年のCOVID-19の経済への影響は、2020年に業界が耐えたものに比べて大幅に軽減される見通しだ。現在のCOVID-19対策コストの水準では、家畜および家畜類の処理コストは一年前に比べて推定で約10%高いが、これは2020年春に業界が耐えた水準よりは、はるかに低い。

おわりに、2021年の見通し

米国の食肉業界は、2020年に成功より多くの課題を経験してきた。生産者の多くは赤字だが、それは世界の食品需要において類を見ない、史上最大級の変動の最中のことだ。米国ならびに世界の多くで都市封鎖が起きた3・4月、米国の消費者の食品購入方法と購入場所は大きく転換し、食料品店の売上は30%増加し、外食店の売上は半分以下にまで落ち込んだ。この激変にもかかわらず、食肉および家畜業界はビジネスモデルを急速に転換させ、この数十年間で類を見ない高水準となった「自宅で食事する消費者」に適応した。

データ3:家畜および家畜類の価格



出典:USDA・AMS、CME

市場におけるこうした変動と摩擦により、2020年の食肉価格(グラフ3参照)は軟化し、収益性も低迷した。不幸にも廃業した生産者もいるが、それは10年以上前のリーマン・ショックに見られたほどの水準ではない。今回は、業界が何とか生き残れるよう、資本市場、連邦準備金、連邦政府、

そして流動性を保証するために機能している全ての金融機関が利用できたことで、食肉および家畜類の生産者を取り巻く環境ははるかに整っていた。2020年後半の業界マージンは、春季よりはるかに良好ではあるが、2021年に食肉業界が利益を得る機会は、より限定的になるだろう。

**CoBankの情報部門は読者の皆さまのコメントやご意見をお待ちしています。
KEDRESEARCH@cobank.com.までお送りください。**

免責事項:このレポートで提供される情報は、投資、税金、または法律上の助言を目的としたものではありません。このレポートに含まれる情報は、CoBankが信頼できると見なす情報をもとに編集されています。しかし、CoBankは内容に関していかなる表明または保証も行わず、このレポートに含まれる情報、資料、第三者の意見、およびデータについて一切の責任を負いません。CoBankは、このレポートに含まれる情報を基に行われた決定または行動に対して、いかなる場合も責任を負わないものとします。